

らなかつた、といつて此の儘には何地へなりとも一刻も早く船を着けるの外に策がないので逆風を犯して船を其の方向に進めた。天運強ふして一同は幸にして陸に着いた、茲に初めて蘇回の想をした、コロンブスは此の後またも風浪に遭ふて不幸難破の危難にあはぬとも限らぬので發見の模様を島人に告げようとした、乗組の半数を上陸せしめた處が島守は多くの兵を率ひて来て水夫等を生擒とした、未だ上陸してゐなかつたコロンブスは此の様に嚇として怒つた、彼は陸上の島兵等の中に至つて島守を捕へ若し斯の如き無道の擧をなすに於ては全島を侵畧すべしと脅しつけた、此のようにして幸に事なくして止むだ、此の島は葡領のサンタ・マリア島であつたのだ。斯くてサンタ・マリア島に海の鎮まるを待つて又も出帆して東に急いだ、一同は事なかれと祈つてた。

三月三日に至つて再び海は荒れだした、帆は破れ、櫓は折れて其の艱難は非常であつた、水夫等は必死となつて此の苦難と戦つた、けれども風伯の暴威はたくましくして船は針路も定まらぬので今度こそはいよいよ海の藻屑とならねばならぬかと思はしめた。神は海洋の秘鍵をコロンブスの手に渡して、さるるくのではなかつた。偉人を殺すにはあまりに愛に富み給ふてた。險難を犯して而も彼等は無事なるを得た、船は其の中に葡國のリスボン港に着いた、一同は欧州に生還して欣喜たくところを知らなかつた、水夫等は葡國の山や町やを目前に認むると共に狂喜して泣いた、泣いたも道理、幾日月の苦難はヨモや今日あろうとは思はれなかつたのだもの、コロンブスも神に感謝の涙は禁め得なかつた。而しながら一難去つてまた一難來る、運命の神が悪戯の手はコロン

プスの上に伸べられてゐた、知らぬが佛のコロンブスは葡國王に面會して得意の面に遠征の大成功大勝利を語つた、大西洋の神秘の幕を破つたコロンブスの破天荒の壯圖は葡王の心中を惑はしめた、葡王はたゞ彼の語る所を黙して聞いた、お世辭ばかりの稱讚の辭も今日のコロンブスには嬉しい、彼は嘗て陋劣なる手段を弄して自分の偉業を邪魔した葡國に向つて最も男らしき仇討をした。コロンブスは得々として船に歸つた。
葡國の政府に於ては見ん事コロンブスに仇を討たれた無念があつた、リスポンの朝廷には群臣星の如く集つて御前會議が開かれた。西班牙政府に先きを越された今度の失敗を回復す爲めにコロンブスを暗殺すべきや否やといふ問題は其の日の主要議題であつた。
一國の利害のかゝる所、徳義などを省みてる時でない、西班牙人に

先んじて天涯の樂土を占有せんが爲めにはよろしくコロンブスを殺すべしとは一同の意見であつた、醜陋なる葡人根性は適れの大偉人を譯もなく殺さんとして恥ない點に現はれた。
コロンブスの命は危い、風前の灯よりも果敢ないのであつた。海洋に魚腹を肥やさずして止むだ命は慾に塊つた葡人の毒手にとられようとしてゐる、運命の神さまは得意満面なるコロンブスの後で笑つてゐたが、道に劣悪なる葡政府も世間のきこゑは恐ろしかつた、怎奈ことしては列強の手前も如何と思はれる、それよりかコロンブスは其のまゝにすてゝたいて早く遠征軍を繰り出して彼等が発見した土地を掠取するのが得策であるとは迷ふた上での決議であつた。
デモ危いことであつた、怎奈相談があらうとは夢にも知らないコロンブスは平氣なものであつた。

三月十三日に彼はリスボンの港を出帆した。今少し愚圖くしてゐたなら葡國政府の風向がドウ變つて一命を亡くしたかわからない。彼はスペインに向つて船を駛せた。

第二七 未曾有の歡迎

危き處口を遁れたとも知らぬコロンブスは順風に乗じて南に進んだ。出帆後七ヶ月と十一日にして、三月十五日、コロンブスはスペインに歸つた。パロスの港は此の日浪耀いて空に榮光の天樂が起つた。去年八月三日吊旗を掲げて送られた船は悠々として入港した、之を

見、之を傳聞したパロス市民は榮光ある遠征の偉人を迎へんとて海岸に集まつた、歡呼の聲は陸に起つた、水夫等はコロンブスを擁して勇ましく上陸した、迎ふる者も迎へらるゝ者も喜色滿面にて萬歳の聲は天地も搖ぐ計りに響いた。一同は群集に圍繞されて寺院に向ふた、嘗て前途の幸福と冥護を祈つた聖壇の前に一同は齎伏して感謝の祈を捧げた、其處にては喜悅に滿されたる感謝の聖式が最も儼に行はれた。其の夜は至る處に歡語笑聲が涌いて會堂の鐘は限りなき天恩感謝の響に市民の胸を躍らせた、成功の凱歌はパロスの町に充ちて市民の歡迎は其の極に達した。偉大なる榮光は斯くして西班牙國旗の上に宿ることになつた。前古未曾有の大歡迎を受けたコロンブスは歸途の暴風雨に怨みを海

洋にのむで非命に殞れた水夫等の靈を祀り遺族を慰め其の功を稱へた、と共に蠻地に留めた水夫等の家族を慰撫した。

コロンブスは其の間に一つの醜劣なる友を發見するに至つた、さきに海洋にて風伯の爲めに惱まされた時行方不明となつたビンタ號はコロンブス一行のニナ號がバロスに入港した時は既に其處に碇泊してゐた、ビンタ號は嘗て蠻地に於ても逸出したことがあつたが其の時は不圖した點で邂逅したので共に歸途についたのであつた。

コロンブスは而もビンタ號の無事なるを喜んで上陸後ビンゾンを訪ねて經苦の思出話に互に健康平安を祝そうと思つてた、逢ふて見れば事は意外であつた。ビンゾンはコロンブスの無事を悦ぶよりも先づ自己の思惑の相違したことを哀むだ、其の面には不快の色がありくと讀まれた、ビンゾンは實に今度の功を一身に荷はんと期して

ゐたのであつた。

ビンゾンは大成功の榮譽を一身に荷ふて王宮に多大の感賞に與らんとしてゐた、然るにコロンブスの生歸したさへあるにバルセロナの都から刺使はコロンブスのもとのみ來つて自己の計策も野心も空となつたので歸郷して蟄居幾日遂には憤恨と失望の極死するに至つた、元よりコロンブスを嫉み、怨むで呪ひつゝ……。

コロンブスは四月の中旬になつて國都バルセロナに行つた、其處にても城下の市民は大歓迎をした。

彼は其の仮寓に珍奇なる土産を陳列して來訪の貴族、神士に觀せた彼は又其等蠻島の土産について一々説明の勞をとつた。

數日にしてコロンブスは王宮に參内した、金色燦たる天蓋の下に玉座をいつらへて國王、王后はコロンブスを迎へ給ふた。

綺羅星と列ふ群臣列坐の中を進むで玉座に近くコロンブスは拜跪した。王と王后とは貴賞の禮を以てコロンブスを迎へ給ふた、コロンブスは身に餘る光榮の中に新大陸發見の詳細を奏上した。彼は蠻島より持ち歸りし總ての奇貨珍寶を献納した、彼は茲にグラナタ協約に於ける特權を凡て與へらるゝことになつた。前古未曾有の大發見、破天荒の大成功によつてコロンブスは積年辛苦の酬を得た、彼は宿志を達したのである。

第二八 第二一回の遠征

コロンブスは第一回の遠征に於て破天荒の大成功を齎らした、歐州

の國民は凡て彼の偉業を讚嘆して措かなかつた。海洋の秘密は發かれた、不可測の海は開かれた、海洋遠征の冒險熱たゞさへ旺なる西班牙の國內は涌き返る程に景氣だつた、祖國の旗を未見の樂土に建て、其處にて一攫千金の巨利を博せんと欲する者は多くあつた。渺々たる此の海洋の彼岸の陸とは如何なる土地ならんとは國民の等しく夢想する所となつた、行くべし行いて發見の榮譽を擔ふべしとは彼等の希望であつた。コロンブスは茲に第二回の遠征を企圖した、彼は新領土の總督たるを許されてる、彼はセビールの聖會長老フォテスカをインド族長に任じて自己の副總督たらしめた。今度は自ら進み出て此の遠征に加はらんことを望む者も多くあつた

準備は譯もなく出来た、國民は喜んで之を祝した。
 西班牙カジズの港は第二回探検隊の出発地と定まつた。
 千四百九十三年九月二十五日、カジズの町は歡送の人を以て一杯になつた、活氣は満ちてゐた。
 大なる三艘の船と十四艘の漁船とは一千五百人の冒險兒を乗せて朝の輝く灣に帆をあげた、旭光白帆に映じて壯いはんかたなしであつた、陸に歡送の萬歳は起つた、浪を切つて白銀の珠を分けて勇壯なる一隊は港を出た。
 船は前回と同じく西へ西へと進むだ、海は平穩であつた、風は追手であつた、船は快走した、行く内にコロンブスは方向を少しく南にかへた、彼は前に發見したる以外の地に向はんと志したのであつた、航路無事にて船はカナリー島に向つた、水と空の單調に飽いた冒險

兒の眼には名にきくし新大陸の姿が映つた。
 コロンブスはさきに停めたまし同胞を見舞はんとした、新大陸に着くや彼はボハイオに向つて船を駛せた、頓て船は海岸に着いた。
 コロンブスは初めて此處に來つた時を思つて感懐を動かした、新冒險者は初めて見る蠻島の風物に好奇の心を動かされてゐた。
 錨は水煙たてゝ静かなる海に投入された、合圖の號砲は發たれた、ア、残り居たる四十餘人の同胞の歡喜や如何ならん、何れも健在だらうか、異風土の水に熱に病めるはないだらうか、神よ哀れなる同胞の上に幸福給へと思はず祈つた。
 島は静である、人影も認められぬ、海岸の小舎も形がない、たゞ林に囀る小鳥の聲のみは昔のまゝに長閑である、號砲の響は彼方の森に消れた、美しい岸の草花は揺いだらう。

島よりは何の答へもない、不審の眉は顰められた。

第二九 新領土の珍事

號砲の響に小鳥の群がバツとたつた他に静かなる島は無人の境かと思はれた、金鑛を尋ねて山中の探検にいつたのだろうか。

一同は一先づ茲に息を入れることにしてコロンブスは船をすて上陸した、上陸すると共に不審はいよ／＼深くなつた。

海岸に近き河の中には蔓を以て縛したる死体が二個漂へるを見た。其の土人か白人かについては不明であつた、けれども事の穩かならぬは察知し得た、翌日又も他の河中に數多の屍体あるを認めた、其の一人が同胞らしきにはコロンブスも驚いた、いよ／＼……

珍事あ

りしかこの念は痛恨と忿怒の念に混つて起つて來た、彼は同胞の身の上を氣遣ふの想一層に募つて來た。

コロンブスは前回に財貨を蓋へたき。同胞を留めたきし地點にと急いだ、白沙の磯に寄せ返す浪は昔ながらに清い、けれども其の折築いた岩は影も形もない、慘憺たる地の色は一目彼をして忿心頭に發せしめた、紀念にのこる所のものは同胞の着物の破れの塵に雨に滲めるもの位であつた彼は土民の暴擧ありしを知つて激怒した。

其處へ土人の一人は現はれてきた、恐る／＼彼の前に來つて白人の屍体を埋めある地を教へた、其處には土未だ新らしくして草斑に腥風サツと起つて彼の面を掠めた。

彼は痛恨の眼に其の塚を見て傳命の同胞を吊つた。

斯くして居る内に其處へ前回にコロンブスの爲めに心から盡したる

部落の首長の弟が出て来てコロンブスの前に事の次第を物語つた、その語る所は恚うであつた。コロンブスが歸つて後、殘留の白人は黄金と婦人について爭論をして、其の内に一部の者は金鑛探檢の爲めにシバオに行つた、而るに山中にて探檢隊はシバオ王の爲めに殺されてしまつた、シバオの王は探檢隊を屠ると共に此の地に攻め來つて留守居の白人を屠りにかゝつた、此の部落の者も白人に味方して防いだが衆寡敵せずしてシバオ王カオナポの爲めに殘虐なる燒殺に遭ふたのである、その時に我兄なる首長も負傷し、我家も燒拂はれた云々……といふことであつた。

コロンブスは首長に逢ふて見て其の弟の語る所の偽りならぬを知つた、と共に此處の土民の温順なるに反して憎くきはシバオの土民で

あると思つた、金鑛の發見、同胞の仇討、よし此の上はシバオの山國に其王カオナポを屠つて白人の威勢をみせようと決心した。

一同を率いてコロンブスはシバオの蠻民征代にいつた、蠻民は即ち蠻勇である、仲々によく手向つたけれども西軍中には血氣旺んなる勇士がゐたから遂には蠻民を敗つて其の王カオナポを生擒つた。

斯くて同胞の怨恨を雪いだコロンブスはさきに砦のありし所より少しく遠ざかつて新殖民地をつくつた、キング、オブ、カスチールは即ちそれである。

彼は其處に家を建て、柵を造り、種々なる新殖民地に對する施設をして其の經營に忙殺されてた。

彼はシバオに於て多少の金を得たけれども怎奈ことでは迎も彼等の野心は滿されない、土民の言ふ所によれば南に黄金の産地ありとの

ことであつたから彼は新殖民地にドン、ジーゴを殘して南方の探檢に向つた。

第三〇 餘義なき歸航

コロンブスは南に向つて此の島を周つたけれども目的の黄金はなかつた、彼は又土人よりして西へ行くことを教へられて西に向つた、西航して彼はデヤマイカ島を探檢した、其島の土民は殺伐であつて仲々に手に負へない蠻族であつた、島は絶勝の景趣を具へてゐる繪のようであるが黄金に渴したる彼等には詩も歌もなかつた、彼等はなほも南を探檢した、その内に多少コロンブスは健康を害したので新殖民地へ歸つた。

此の時コロンブスは面白からぬ風評を耳にした、大なる慾心を以て冒險の志願をした一行の或者は新大陸に來て以來未だ夢想してゐた黄金の山に上れないので小人の常として早くも不平不満を叫ぶようになつた、それ等の者が本國に傳へたる悪報告は本國政府に於て少なからず彼の信用を損ねた、特に四十餘人の白人非命の死報は本國民が批難の的となつた。本國に於ける自己の名望日に非なりときいたコロンブスは痛心せざるを得なかつた、其の内には本國から新領土視察の俗吏が來た、それ等の者はコロンブスの功を嫉むで眞面目な報はせなかつた。初めて航海してから二年を出でざるに早くも本國にてはコロンブスの凡てについて估價する者が澤山あつた。此の報を耳にしたコロンブスはジツとして居れなかつた、大事を凡

愚にあやまられては取り返しがつかぬと思ふと是非一度本國へ歸つて誤解を釋く必要があると思つた。彼は凡愚の度し難きをツク／＼と感じた、此に於ていよくコロンブスは一旦西班牙に歸つて國民の誤解を釋き政府の疑惑を晴らさんとした、彼の心中の痛苦は察するに餘りありである。千四百九十六年三月、コロンブスはジブオオナボと其の他に生擒したる三十人の蠻民とを連れて想を新大陸に残して本國へ歸るべく出帆した。

コロンブスがカシズの港に安着した時に彼は國民の態度の冷靜なるに驚いた、國民はまた新大陸よりの報告……中傷多き……に對して一團の疑問を抱いてゐたが今度歸る時にもコロンブスは未だ目的の黄金國を發見せないから財寶の以て國民に土産とすべきものを有つ

てゐなかつた、それが即ち國民の冷靜なる態度の因であるとは早くもうなづかれた。

否此の時コロンブスは嘗てフランスの山をのぞんでピノスの橋に向つた時よりも尙ほ甚しき嘲罵と讒謗とを受けた。

彼は直ちに王宮に參して國王、國母の前に自己の正義を説いた、而して兩陛下の愛憐を乞ふた、國王も王后もコロンブスに對しては決して國民のその如く冷靜でなかつた、王も王后も優しき言葉に彼を慰撫し給ふた。

コロンブスが偉大の功績に對して兩陛下は今も疑つては居られなかつた、哀れ國民の悪罵の中心となつて大業を敗られんとしつゝある

彼に對する愛憐の聖慮は昔ながらに變らなかつた。

けれども國民の悪罵は非常であつて逆ても辨解せんに道がなかつた

嫉妬と不平とに發する其の誹謗はコロンブスの一身に集つた。
國民は今や道理も何もきゝわけはせなかつた、仕方がない、彼は黙
して此の悪罵を受けるの外なかつた、けれども中心の無念は實に人
生の辛苦に窶れたる老偉人をして思はず涙を拭はしめた。
彼は輕薄なる人心の轉化に惻然として長太息した。

第三一 第三回の遠航

輕薄なる人情の轉化の甚だしきに惻痛を禁め得なかつたコロンブス
はなほも遠征探檢の壯圖をすてなかつた、彼は國民の漫罵を省みず
して國王、王后に請願していよく第三回の遠航をすることになつ
た、而しながら當時スペインの財政は窮迫してゐた、國費多端にし

て國庫に餘裕はなかつた、そこで彼の第三遠航は思ふように早く行
はれなかつた、彼の爲めに眞の同情者はイサベラ王后のみであつた
のだが、其の内に兎に角に準備も出來た。
船の準備は出來ても悲しや今度は乗組みの者がなかつた、國民は何
地までも悪罵して第三遠航に應募するものは一人もないのであつた。
其處で六艘の船には罪人を乗せて行くことの許を受けた。
千四百九十八年五月、傳倅の老偉人は痛恨の想を乗せて多くの罪人
を率いて第三遠航の途に上つた。
彼は今は凡ての譏譽を忘れて只管に新陸地の發見に腐心した。
コロンブスは此の航海に於てベルデの島を去つて赤道直下を駛つた。
彼は其の熱帯に屬するを知ると共に方向を北西にとつ、進航を續け
た、彼はトリニダットに着して近海を探檢した。

それからコロンプスは桃源國の生命樹の下より流れ來ると傳へらるゝオリノコ河口の島を發見した、彼は次で南米大陸を發見したのであつた、而しながら彼は其の發見地の南米大陸たるは固より解せないであつた、彼は誤れる地圖を信憑してゐたのだ。
八月十四日になつて船をヒスバニオラの方へ進めた。
其處にコロンプスの爲めには又も一難事が起つてゐた。ヒスバニオラに自己の代理として止めていた義弟ハルソロミエーに對する領民の不平は今や紛擾を惹起してゐたのであつた。コロンプスは之が鎮定に苦心した。率ゆる所の者は罪人である、彼は持みなき勢力を以てなほやうやくに一部の鎮定をなし得た、而しながら紛亂は絶えないで新殖民地は何となく危くみわた。
たゞさへコロンプスには敵がある、中傷と誹謗は一身に集つてゐる。

新領土に恚うした紛亂のあつたのを誰がだまつて居ろう、反對派の小人輩が何で善く傳へよう、彼の衷心の苦勞を察するような者は誰にしたくもない。
本國への報告は例によつて悪評ばかりである、彼等はコロンプスを悪罵せなければ恥のように考へて言葉をつくつて中傷した、國民の輿望は今や全く墜ちたが、而し未だ西班牙王と王后とは彼を憐むのであつた俗吏の毒言も奸吏の讒訴も迂愚なる國民の評価も敢て耳には入れたまはぬのであつた。
けれども國王は深智の君であつた、早くもコロンプスの統率者たるに適せないことは察して居られたが、此の老偉人が功に對してグエナタの協約を無にすることは出來ないので私に彼の爲めに惜むで居られた、如何にせよとの問題は早くから王の胸にあつた。

今や國民に信なく、外領民に徳化及ばず、事はやうやく大ならんとするのを見て國王は遂に決せらるゝ所があつた、政府より勢力ある一人をやりて新領土の視察を命じて機あらばコロンブスに代つて總督とするの外はないと思はれた。
王はドンフランシスコ、ポバジラなる者に全權を托して新領土の視察を命じ給ふた。
視察隊の一行は千五百年八月二日に、サンドミンゴ島に着いた、ポバジラは此島の河岸にて刑死せる屍体を發見した、ポバジラは新領土の民からしてコロンブスとバルソロミューとの殘虐なる施政に對する哀訴をきいた、彼は風聞の相違せざるを信じて直ちにコロンブス等を縛した、コロンブスは譯もなく恚うして小吏の舌に禍せられるゝに至つた、コロンブスは牢囚の憂目に遭つたのであつた、其罪

とする所は神の前には義なるべきことであつた。
コロンブスと其の義弟等は縲繼の恥を受けて本國に送還されることとなつた、彼は今や其の足には鐵鎖を縛された、彼は故なくして受くる此の罪科を神に訴へて泣いた。
ポバジラは王命を笠に着て權を恃んで此の老偉人を遇するの禮を知らなかつた、ポバジラは西王の選み給へる奸惡なる一小吏であつた。彼には虎の威をかる狐の藝しかなかつたのだ。
だからしてコロンブスが途中で逃げはせぬかなど、そんじよそこの小罪人扱ひの心配をしたのであつた、逃げられては一大事だからといふのでコロンブスの足には殊更らにゴ念の入つた丈夫な鐵鎖を縛し付けた、看守が重き鐵鎖を持參した時に之を見てコロンブスは力ある聲にていつた。

「予は王命の予を許さん爲めに之を解けよと下る迄は甘んじて此の恥を受くべし、されど若し王命の下るあらば予は斯の如き物を賜ひし王の恩恵を紀念せん爲めに長く此の鐵鎖を保存すべし」

と其の聲には痛刻なる哀きと怨みがこもつてゐた。

斯くて船に乗せられて東の國に歸ることになつたが船中の看視は至つて寛であつた、ビルレゴと呼ぶ警護の吏は案外に事のわかつた男であつた、此偉人を遇するに自己の職務を缺かざる限りは禮を以てするのであつた、コロンブスは幸福にして航海中は思つた程の酷待をせられずにすんだ。

三度西航し三度目に東航する時は即ち此の態である、コロンブスは思ひ出多き海に向つて泣いた、悪罵せる國民の中に鐵鎖に索かれて歸るコロンブスの明日の運命や如何に、國民の嘲罵や如何に。

白雲怪しく搖曳して毎夜東に流るゝ星の數は多かつた。

彼は今第三遠航の使命を全ふせずしてカジズ港に歸つた。

第三二 鐵鎖解かる

鐵鎖に縛せられた老偉人の船は徐々としてカジズの港に入つた、衆愚は聲を揃へて彼を罵つた、新世界に斯の如き騷亂を起すに至つたのも發見者の罪であるとの非難の聲は高かつたが、道に識者はボバジラの非道に激昂した、

今は悪罵も同情も耳にきかず黙して上陸したコロンブスは一宮女の手を経て事の詳細を唯一人の知己と恃むイサベラ女王に奏上した、女王の驚愕は非常であつた、事もあるう、人もあるう、何の故を以

て偉勳ある老臣を鐵鎖に縛した、憎くきはポバジラである、度すべからざるは賤民である、王後の震怒は又大であつた。鐵鎖は解くべし、罪は赦すべし、急ぎ參内せよとの命を下し給ふた。其の上イサベラ王后は若干の旅費をさへ送りたもふた、コロンブスの喜は如何ばかりだつたらう、いつも變らぬ王後の愛憫の深きに泣かずには居れなかつた。彼は晴衣装を着て従者さへ隨へてグラナダの行宮に參内した、昨日縲繼の恥を受けて鐵鎖の重きに泣いた人は今日國王の前に其の罪を自ら辯護するのであつた。彼はフェルチナンド王の前に於ては胸に言ひ知れぬ瘡へを覺て其の言葉さへ鋭かつたがイサベラ王后の前に跪いて玉顔を拜した時に白髪の老偉人は經苦の皺に滲むせき敢ぬ涙を節くれたる手にて拭

はずには居れなかつた。委細は奏上した、事情は明になつた、王后は涙ながらの彼の辯護と哀訴をきいて思はず同情の涙を流し給ふた、國王も道にコロンブスの身を哀れと思はれた、ポバジラは召喚することに定つた、王も言葉をきはめて彼を慰めたまうた。けれどもコロンブスをして總督たらしむるには其の器にあらざるを憂へたまうたから仲々に許されなかつた。コロンブスの心は穩でなかつた。

第三三 第四回の探検

千五百二年になつてコロンブスは第四回の探検を企てた、彼は老軀

を提げてなほ西方の蠻島を探検せようと欲したのであつた、國王は之を甚だ喜ばれなかつた。餘儀なくして許可せられた時に彼の爲めに備られたる、船は年古く經たる小漁船であつた、元より長年の航海には耐ゆべくもなかつたがコンプスの遠航を心よしとせざる王は特更らに斯の如きものを撰ましめたのであつた、老朽船の仲々に重くして速く駛するに耐へない上に恁奈船にて何日まで航海が出来ようか、人にも世にも棄てられんとする自己の命運の此の船と等しきを思つたコンプスは此の船をも喜んでかり受けて航途に上つた。彼は四艘の老朽せる小漁船を駛らせて西へくと進むだ、老偉人の胸は大洋の浪よりも靜である、船は蠻島に達して其處此處と探検を初じめた、彼の意氣は壯であつた。

コンプスは幾多の困難に遭遇した、新らしき丈夫な船にてもなかくに危険は多い仕事である、それを彼は重くて心細い小老朽船によつてやるのである。彼の熟練と技量と膽度とがなかつたならば、迎も海洋の彼方に発見の使命を果すなどは出来べきものでない。彼は此の航海に於てホンヅラス灣、ヴラグア、ポルト、ベロ等を発見した、而しもう船が此の上の航海発見に耐へぬので遂には最後の訣別を新大陸に告げて歸航の途についた。老軀再び遠航の程も計られぬ、彼は漠々たる海にも感慨深くして其の眼は千古の神秘を呷いてうねる浪の上に哀しき怨をたづねてゐた彼は哀寔の想を思出多き海に流して本國に歸つた。歸つたときには王より與へられたる四艘の船はたゞ一艘を餘すのみであつた、それさへ此の後の航海に耐ゆべしとは思はれなかつた。

愆くして第四回の遠航は終つた、彼はなほ未練を西方に残してゐた彼の頭は雪と化し、其の額には皺の敷いよゝゝふるた。

第三四 其の晩年

コロンブスは白髪のお翁となつても未練は戀しい新陸地にあつた、ならばゆきたい、逢ひたい見たいの想は常に胸を離れなかつた、が而し長い間の浮世の苦勞に身軀も精神も疲れてしまつた、心の奥には何んのだいふ叫びはあつても吾身で自分の思ふ様に元氣よく働かすことも出来なくなつた、其上幾度の病氣にも弱つてゐるし、一方ならぬ心の疲れは目に見ゆる程に五体に表はれて、ホーンに年だけはとりたくないものとツク／＼思はれることさへあつた。

精神にしてもそうである、昔のことを思ふたなら何れ思ひ出は涙の種ならぬはないけれど、わからないのは人の運だと思ふと怕ろしいような馬鹿らしいような、扱て何となく面白いような感知もする、十四や五で國を飛出して七十幾つの今日までといへば人の生命は五十年といふ其の五十年よりも長いのだもの娑婆の風なら嫌になるまで吸ふてる筈、憂いもつらいも何も彼も浮世の味は嘗め盡した、それにして今にして日頃夢想のジバングを發見出来ぬはうらみだけれど、それも夢、これも夢、何れは幻の影を追ふ現の迷ひが人の世のアホらしいと氣の付いた時には愆うした身かとも思つてみる、とコロンブスは果敢ない思に老の身を嘆たすには居れなかつた。特にコロンブスが十年來の恩顧の人、世界に一人の知己と特んだイサベラ女王の崩御に逢ふここからは氣も心も意氣地ない程變つてしま

つた、たのみなき世をはかなむで……。
 彼は王后の崩御を悲しむで泣きの涙で日を暮らした。
 「汚ない、いやな此の世界、果敢ないいむべき、浮世をすてゝ天の
 王座に行かしたつやつた王后は、ア、今頃は心うるはしくも神様の
 御國で平和に休むで居られるだろう」
 といふ其の子ジイゴに送つた手紙の中の文句は頓ては彼の心の願ひ
 を、心が言はした筆の綾だつたのだろう。
 いやそれも道理である、イサベラ王后の崩御の後にはスペイン國の名
 と富とを世界一にしてくれた大恩人のコロンブスは王に棄てられ、
 國民にすてられ、廣い浮世に短い餘命を送る家さへなかつたのだも
 の、彼は貧に病に苦しめられてた。
 コロンブスは王后の死の悲しいにつけても國王の無禮横暴を憤つた

彼は國民の惡罵を思ふにつけても自己の不運を呪はずには居れなかつた、彼の心は日に弱くなつてきた。
 慙うして貧に責められ、病に苦しむ、心の憤り、胸の哀きに昏き晩年を送つたコロンブスが耐へ難き凡ての苦難を忘れしむるものは涙多き勇ましき半生の思出であつた。
 彼の身軀はいよく弱つた、心の弱さは逆も此の世の苦痛に耐ゆべくもなくなつた、死の影はソツと迫つて來た。
 スペイン國上下の無道と殘虐を憤つた彼は枕邊の友に「予は今や予の爲すべきことを凡てなした、之よりはたゞ慈愛の天父が召し給ふ日を樂しんでまつばかりだ。」
 といつた、其の聲には老偉人が天まで達けとの心の底の苦き響をもつてゐた、彼の面には平和が宿つた。

千五百六十年五月二十一日、新世界發見の大偉人は傳命の最後をバラドリッドの旅宿に急いだ。

遺骸はバラドリッドの市中に葬つた、さきの鐵鎖と共に……。

其の後故あつてセビルに改葬した時、其の子フェルヂナンドの建てた墓標には次のような文句が刻まれてた。

「神は西班牙とコロンブスとに新世界を給ひぬ。

其の後再度の改葬あつて今はキューバ島内ハバナの一寺院に光榮ある

此の偉人の墓標は移されてある。

壯快なる偉男子が哀れなる最後に有情の兒を泣かしてから四世紀。

世界の文化は進み、交通は開けて新大陸は今や世界開明の粹を誇つてゐる、ハバナ市の一寺院に傳命なる偉人の半生を吊つて當年の壯

圖を思ふ者は、噫……今にして何人あろう……!?

冒險の快男兒 新譯 コロンブス (終)

昭和二年十二月二十日印刷
昭和二年十二月廿五日發行

泰西偉人文庫與附

【定價金壹圓】

不許複製

發行者

善松堂 福井善吉
大阪市南區松屋町四番地

印刷者

瀨川虎太郎
大阪市北區上福島北二丁目九四
電話土佐堀四九三三番

發行所

大阪市南區松屋町四番地

善松堂

電話東一七九四番

興修 味養 課外 讀本

ナポレオン

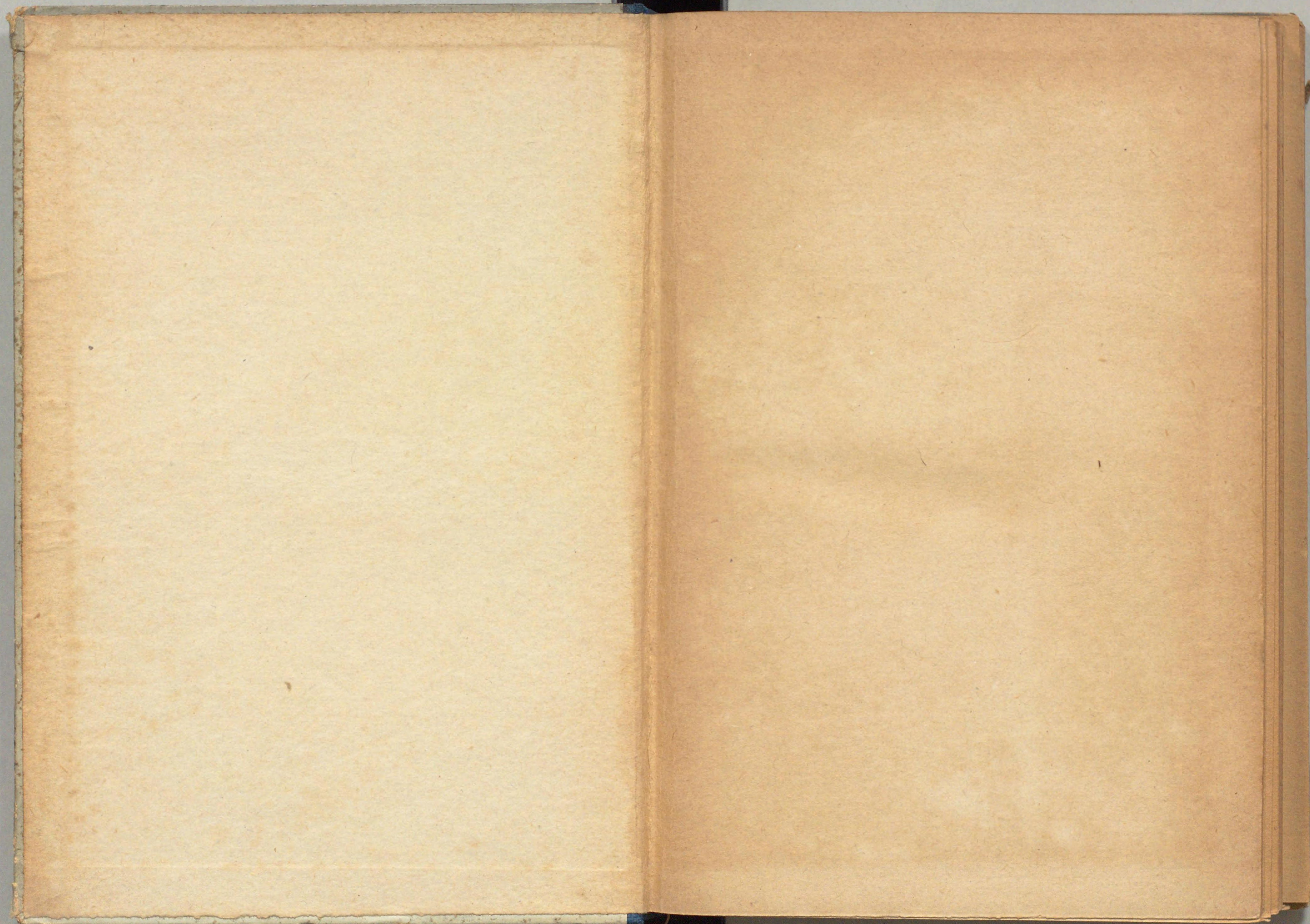
四六判二百卅頁
定價金壹圓

身を一塊の孤島に起し微塵にも劣りなん一少年が一躍佛國帝王として歐洲の天地を風靡し、世界統一も一茶飯事なりとの大野心を持つた用兵、神の如き不出世の英豪、ナポレオンも、一朝モスコウに敗れて終に立たず、僻れ北海の孤島セントヘレナに流罪され、大西洋に碎く月影に無限の恨を持つてフランスの帝都を偲びつゝ悶々として死す、その波瀾の意外なる、古今東西その比を見ず、此の劇的の一大生涯を餘す處なく筆者の生氣溢れて一氣に靈筆を走らす實に青年必讀の最良書である。

フランクリン

四六判二百卅頁
定價金壹圓

地震、神鳴、火事、親爺恐ろしいもの、一つとして教へてゐる雷、我等は只これは自然の現象の一つとして逃れ得ない恐ろしいものとして、平氣で見のがしてゐたものであるのに、一人この神の子の様なフランクリンは、これに不思議を感じ、他人は勿論親兄弟にまで阿呆狂人この、しられながら、天空に針金を立て、終に今日の電氣の發見をなす、電車が走る、電燈がつく、ラジオが放送される、物理化學醫療に今や電氣萬能の世の中、人類文化の大恩人、フランクリンの苦心をこの一書に蒐む青年必讀の良書である。



児乙部27-S-5



1200600483603

禁
複
写

